

Melville の *Mardi*—円環の世界—

水 木 慶 子

— 1 —

Mardi はアメリカの19世紀作家 H. Melville が *Typee*, *Omoo* について1849年に出版した第三作である。南太平洋での自身の体験をもとにした前二作が好評だったのに力を得て、当初、Melville は第三作も同じような作品にするつもりであったと思われる。ところが、執筆を始めて半年ばかりたった頃、彼は出版業者にあてて一通の手紙をしたため、自分は「『オムー』から続く真実の体験談」(‘a bona-fide narrative of my adventures in the Pacific, continued from *Omoo*’) を書くつもりだったのだが、今やその計画を変更してしまったことを告げている。

Well : proceeding in *my narrative of facts* I began to feel an incurable distaste for the same ; & a longing to plume my powers for a flight, & felt irked, cramped & fettered by plodding along with dull common places, —So suddenly abandoning the thing altogether, I went to work heart & soul at a romance which is now in fair progress, since I hard worked at it under an earnest ardor. (1)

ここで、Melville は facts の作品——体験談——を書いているうちにそれでは満足出来なくなり、もっと高度のもの——ロマンス、虚構——に飛翔せずにはいられなくなってしまったと言っているのである。また、別の手紙で、彼は、「我々、作家の中に存在する、ある抑え難いものが、私に計画を変更させ、今あるような *Mardi* を書かせたのだ」(2)とも言っている。つまり、今日我々が読む *Mardi* とは、Melville がある抗し難い内面の欲求のために、冒険物語を途中から書きかえたものなのである。

。さてそれでは、このようにして書かれた *Mardi* とは、いったいどのような作品なのであろうか。

物語は南太平洋を航する捕鯨船上で始まる。主人公で語り手の「私」はロマンチックな夢想家の青年 (“a boy”)(3)で、この捕鯨船に乗り組む船員である。彼は長い退屈な捕鯨航海にうんざりしており、ボートで船を抜け出して、西方にある夢の島々、Kingsmill 諸島——‘islands, …invested with all the charms of dream-land’ (p. 7)——へ行くことを企てる。そして、仲間の Jarl を誘い、ある夜、ついに、ボートで船を脱出することに成功する。こうして二人は、いろいろすばらしい体験やおそろしい体験をしながら西へ向かう。(ここまでは、Melville の今までの冒険物語とさほど違ってはいない。おそらく、このあたりまでが、計画変更前に書かれた部分なのであろう。)

西への旅を続けるうちに、彼らは、中央にテントを張った、奇妙な、原住民のボートに出くわす。「私」はそのテントの中には、これから原住民たちの神のいけにえとなる美しい乙女が隠されていることを知り、司祭 Aleema を殺し、乙女を奪って逃げてしまう。さて、この金髪、青い目、白い膚をした娘 Yillah は、驚くべき身の上話を「私」に語って聞かせる。自分は、Amma 島という島で生まれたのであるが、幼い頃に神隠しにあって、Oroolia 島(ポリネシアの天国)に連れてゆかれ、そこでオリーブ色の膚は白に、黒い髪は金色となり、ついには花のつるに捕えられて Oroolia の花の一輪となった、その後、貝の中に閉じ込められて Amma 島に渡りそこで祭られていたのだが、とうとう今度 Tedaidee 島沖の渦巻を通して Oroolia に帰ることとなり、その旅の途中であったというのである。「私」と Yillah はお互いに魅かれあう。そしてほどなく一行は西方に見知らぬ群島を発見、ここで、「私」は原住民たちの神 Taji に間違えられたのを幸いに、以後、Taji の名を名のる。(この論においても以後は「私」のことを Taji と呼ぶこととする。) 彼らはこの Mardi 群島の中の島、Odo の王 Media に迎え

られ、そこで Taji は Yillah と幸福な日々を送り、Odo は彼にとって天国となる。ところが、ある晩全く突然に Yillah が姿を消してしまい、Odo のどこにも見つからなかった。Taji は嘆き悲しんでいたが、やがて、彼女を探して Mardi 群島の島を一つ一つ訪ね歩くことを思いつく。

いささか筋を追いつぎた感があるが、ここまでが、この 650 頁を超す大作の約三分の一にあたる部分である。Melville 流のロマンスの名に恥じない？かなり荒唐無稽なここまでの物語は、いったい何を表現しようとしているのであろうか。

まず、美女 Yillah とはいったい何者であろうか。Yillah は血肉をそなえた女性というよりは、むしろ、ある観念のアレゴリー（風喩）のように思われる。彼女は「完全な美と純潔」（‘…Yillah was all beauty, and innocence’ : p. 643）であり、その他、善（goodness）、愛（love）、徳（virtue）慈悲（charity）⁽⁴⁾などのあらゆる善なる美しい価値と結びつけられている。また、彼女は生まれは人間であるが、天国でその姿を変えられ天国の一部となった者でもあり、彼女の金髪、青い目、白い膚、そして胸につけている真珠はこの変化のしるしなのである。Taji は彼女のことを ‘My heaven below’ (p. 643) と言っている。つまり、Yillah とは天国の似姿であり、善・美・調和のアレゴリーであると言ってよい。そして、ロマンチックな青年 Taji が Yillah を発見したということは、彼がこの世に善・美・調和を見出した、いや、この世を善・美・調和だと認識したということであろう。

少年・青年時代には人は自分の若い熱い生命を対象に投影して見るので、世界は輝かしいものに見える。Taji の旅に同行することになった Babbalanja（後出）の言葉を借りれば、「我々は、子どもの頃には、うっとりとした目つきで、月の下に広がる多くの不思議な物をながめ、世界はテントの中に隠された麗人のように見える」⁽⁵⁾のである。「テントの中に隠された麗人」という言葉は、当然 Yillah を連想させるから、若い頃は世界が完全なものに見えるという意味であろう。そしてまさに、このような状態こそ、

Yillah を発見し獲得した、この時点での Taji の状態であり、それゆえ、彼は幸福の絶頂にある。‘…with Yillah seated at last in my arbor, I looked round, and wanted for naught,’ (p.189) そして、彼の心は、この美しい世界とそれを作り給うた造物主への信頼の念で一杯である。

Oh stars! oh eyes that see me, wheresoe’er I roam: …Wondrous worlds on worlds! Lo, round and round me, shining, awful spells: all glorious, vivid constellations, God’s diadem ye are! To you, ye stars, man owes his subtlest raptures, thoughts unspeakable, yet full of faith. (p.179)

しかし、このような世界認識はやはり幻惑されたものなのであり、悲しいことに長続きはしないのである。Babbalanja は言う、「何とすぐに、すべての物は色あせてしまうのだろう。」⁽⁶⁾と。Taji の場合も例外ではなかった。Yillah (善・美・調和) はあまりにも早く姿を消してしまい、Taji は彼女を探すため、そして、もう一度世界を認識し直すために放浪の旅に出るのである。

— 2 —

さて、Taji の Yillah 探索には四人の同行者があった。Odo の王で政治家の Media, 哲学者 Babbalanja, 詩人 Yoomy, 語り部で歴史家の Mohi である。この四人は、Yillah を失った Taji をも含めて、いずれも未だ宇宙と自己の関係という青年期の問題を解決しえていない、それゆえ一人前の男とはなっていない boy-men⁽⁷⁾である。そして、四人はそれぞれの立場から、Yillah 探索に興味を感じて同行して来たのである。この中で最も興味深い人物が Babbalanja で、彼は、探索が始まると急にすっかり無口になってしまう Taji に代り、後半の主要人物となってくる。博学の彼は、Babbalanja という名の通り (‘babble’ はべちゃくちゃしゃべるという意味)⁽⁸⁾、どんな話題についても長々としゃべり、自分の思想を披露する。

若く健康な人であれば誰でも、晴れた日にすみずみまで微笑んでいるよう

な美しい世界を見て、世界は、いや宇宙は、一つの大きな生命であり、自分はその一部なのだと感じるであろう。これは理屈ではなく、ただ、お腹の底からそう感じるのである。まだ、中年にしかない Babbalanja も、この若々しい喜ばしい感情を忘れ去ってはいない。今ではもう時折になってしまったが、それでも彼は、Mardi (世界) は地軸に到るまで生き生きしており、(‘Mardi is alive to its axis’: p.458), 自分も含めすべては大きな魂の、神の、一部なのだと感じることもある。

“Five hundred thousand centuries since,” said Babbalanja, “this same sight was seen. With Oro [God], the sun is coeternal; and the same life that moves that moose, animates alike the sun and Oro. All are parts of One. In me, in me, flit thoughts participated by the beings peopling all the stars. Saturn, and Mercury, and Mardi, are brothers, one and all;” (9)

(pp.615—616)

統一、調和のある世界像がここにはあらわれており、これはまた、Yillah を失う前の Taji が持っていた世界像と重なるものである。

さて、生命の横溢した宇宙の一員としての自己、力強い神の一部である自己という意識は、必然的に自己に対する信頼につながる。Babbalanja は言う、Oro (神) とは「人間を限りなく偉大にした者にすぎない」(“And in his faculties, high Oro is but what a man would be, infinitely magnified.”: p.426) と。さらに彼は言う、「だから、すべての物にあこがれようではないか。我々をおそれさせる物は何もない。もし驚が太陽を見つめるのなら、人間も神々を見つめてよいのではないだろうか」⁽¹⁰⁾ と。そして、彼は自分に備わっている「理性」(reason) を駆使して宇宙の謎を探ろうとする。以上のような Babbalanja の言葉からは、キリストとは神となる人なり⁽¹¹⁾ という意味のことを言った Emerson の言葉が連想され、ここに、この当時のアメリカ人の旺盛な楽天的精神が反映されている。

しかし、Babbalanja のこのような探求は彼にいったい何をもたらしただろうか。それは、まことに皮肉にも、悪魔が語るにふさわしい禁断の知恵であった。⁽¹²⁾ そして、それを語る Babbalanja は「気が狂っている」(“mad”)と言われる結果となったのである。

Babbalanja はまず、この世は必ずしも喜びにばかり満ちているのではなく、いや、むしろ、人間の苦しみ悲しみにあふれていること⁽¹³⁾、悪が蔓延していることに目を開かれるようになった。しかし、伝統的な宗教の教えによれば善なる全能の神が支配しているはずのこの世界において、いったいなぜ、人は苦しまねばならず、また、悪の存在が許されているのであろうか。現世は人間の試練の場であり、悪魔はほんの一時期だけ世界支配を許されているのだと人は言う。しかし、それでは、神の存位に空位期間があることになるではないか。また、正しき者の現世における苦しみは来世で償われるのだと言われている。しかし、常に正しいはずの神が償いをしなければならぬというのは奇妙ではないか。なぜなら、償いは、ある人に対して不当な行為をしたからこそするものであるから。むしろ神は善悪を超越しており、何の感情も計画性も達成すべき目標も持たず、人事には無関心で、ただ永遠に沈黙しているのみ、と言った方が適切ではないのか。来世が存在し、そこで正しき者の苦しみが償われるなどということはありえない、と、Babbalanja は考える。

“Still vainer to say, that all Mardi is but a means to an end; that this life is a state of probation; that evil is but permitted for a term; that for specified ages a rebel angel is viceroy. — Nay, nay. Oro delegates his scepter to none; in his everlasting reign there are no interregnums; ...Yet, some tell of a hereafter, where all the mysteries of life will be over; and the sufferings of the virtuous recompensed. Oro is just, they say... But to make restitution implies a wrong; and Oro can do] no wrong. Yet what

seems evil to us, may be good to him. If he fears not, nor hopes, —he has no other passion; *no ends, no purposes.* He lives content; all ends are compassed in Him; He has no past, no future; He is the everlasting now; *which is an evereasting calm;*” (p. 620)

このような沈黙の神という観念から、神の死、神の不在という観念までの距離はほんの一步である。Babbalanja は、はっきりと言葉に出して言いもしないが、すでに彼の頭の中には「神は死んだのだ、いや、そもそもの始めから、神なる者は存在しはしないのだ」という考えがあると思われる。これはおそろしい考えである。なぜなら、宗教は神の存在を想定することによって、この世の状況に意味づけをしてきたのであり、神の死と共に、この意味づけ（すなわち、宇宙には計画性が存在し、現世は、来世——神の国——に入るための試練の場で、正しき者は来世で報われるという意味づけ）もまた、失なわれてしまうからである。そしてこの時、我々の眼前には、意味を失った、混沌・茫漠とした世界が広がるのである。

だが、人間とはおよそ自分が存在する世界の状況に、そして自分の生存に、何らかの意味を与えずには生きてゆけない動物である。そこで、人間は世界を再構成しようとする。すなわち、世界を見つめ、そこから何らかの意味、法則、秩序を引き出そうとするのである。

ところが、物を、そしてその総体としての世界を観察し始めると、人はやがてあらゆる物が流動していることに気づくのである。Babbalanja は言う、
“Nothing abideth; the river of yesterday floweth not to-day; the sun’s rising is a setting; living is dying; the very mountains melt; and all re-volve : —systems and asteroids; the sun wheels through the zodiac, and the zodiac is a revolution. Ah gods! in all this universal stir, am I to prove one stable thing?” (pp. 237—238)

この Babbalanja の言葉によれば、この世のあらゆる物は片時も一点にと

どまっていようとはしない。それは常に変化し流動し、180度くると回って逆転する可能性を秘めている（太陽が昇ることは沈むこととなり、生は死となる）。ところが、逆転した物はその地点にとどまっておらず、さらに180度回ってもとの点にもどる。かくして、ちょうど黄道をめぐる太陽に代表されるように、あらゆる物は円環運動をくり返し、“all re-volve”), その流動の軌跡は直線とならず円となる。

これは大変やっかいな事態である。なぜなら、常に変化している物の本質を一つに決定することは出来ないからである。いわば、物の本質は、円周上のあらゆる点となってしまって一点には決まらない、曖昧になってしまうのである。例えば、海はある時は非常に美しいが、またある時はとてもおそろしいものであり、その本質は、美しさとおそろしさを両極とする円周上を無限に揺れ動いていると言える。そして、物（対象）がこのような常に円環運動をしているのであるから、それを見つめる観察者の認識もまた、物の流動にあわせて流動し円を描いてしまう。ある物（対象）の認識が円周上のあらゆる点となってしまって一点には決まらない、つまり、観察者は、ある物についての唯一の定まった認識——対象AはBであるというような——を持ちえないのである。そして、物（対象）の本質が一点として啓示されることでもない限り観察者の認識も一つに定まらず、彼は円環から抜け出せない。「進歩なしに永遠に円環を循環することになってしまう」（“Wherefore, it is a perpetual cycling with us, without progression;” p. 460）のである。

Babbalanja もこのような円環に捕えられた観察者の一人である。彼は言う。

“Thus, thus, my lord, I run on; from one pole to the other; from this thing to that. *But so the great world goes round*, and in one somersset, shows the sun twenty-five thousand miles of a landscape !” (p. 614)

ところで、物（対象）に忠実な観察者にとっては、物自身がくるくる変りその本質がはっきりしないのであるから、人間は、ある物について確固たる意見、見解などは持ちえないことになってしまう。Babbalanja はいろいろな話題について実によくしゃべるが、その論には結論があったためしがない（はっきりとした最終的な意見を述べない）。そのことを皮肉って、Media 王は「あなたの論はいつも円環だね」（“what have you come to in all this rhapsody? You everlastingly travel in a circle,” p. 460）と言っている。況んや、このような観察者にとってみれば、常に流動している世界についての確固たる世界観など持ちえるわけがないのである。Babbalanja は、直感的に、自分は生命の横溢している美しい宇宙の一部であると感じることもあれば、また逆に、理性によって、神の不在こそ真実であると信じることもあるのだ。いわば、彼はこの二つの相反する世界観をそれぞれ天頂、天底とする円環をぐるぐる回っていて、そのどれ一つにも落着くことがないのである。そして彼は、一つの認識、見解、世界観にとどまらず、円周上のあらゆる点を公平な目で見ることこそ、対象（物・世界）に忠実であることだと信じる。Media 王の “you stay nowhere.” という言葉に答えて、Babbalanja は言う、“Ay, keep moving is my motto,” (p. 504) と。まさに、円環を動き続けることこそ、Babbalanja の信条なのである。

しかし、どんな円にも中心があるではないか。円周上のあらゆる点の中心となる点が。このように、物の本質が、物の最終的意味が、すべての流動点を統合したものとして一点に啓示されることはないのだろうか。Babbalanja⁽¹⁴⁾ は、いわば、円の中心点として啓示された物の本質をつかもうとしている。

“I am intent upon the essence of things; the mystery that lieth beyond; the elements of the tear which much laughter provoketh; that which is beneath the seeming; the precious pearl within the shaggy oyster. I probe the circle's center; I seek to evolve the inscrutable.” (p. 352)

物（対象）の本質、最終的な意味をつかむことが出来れば、ひいては世界が何者であるかが認識でき、ある世界観をうち立てる（世界を再構成する）ことが可能となろう。しかし、Babbalanja は、もしかなくことならば、物の本質が世界の調和を暗示するような善・美・調和として啓示されることを願っているのである。ここでもう一度先程の引用を見てみよう。「私は物の本質を熱心に求めている」で始まるこの引用は、それに続く部分で、「物の本質」を「円の中心」はじめ幾つかの他の言葉で言い代えている。その中に、「貝の中の貴重な真珠」という言葉があるが、この言葉は Yillah を連想させる。（天上界から地上に送られた時、彼女は貝の中に入れられており、その胸には天上性のしるしである真珠をつけていた。）つまり、Babbalanja は、物の本質が Yillah（善・美・調和）として啓示されることを願っているのである。そして、これこそが、彼が Yillah 探索の旅に加わった所以であろう。もし、この旅において Yillah が発見されれば、それは物の総体としての世界の善・美・調和を暗示する。そうなれば、彼はもう一度、あの少年の日の統一・調和のある世界観を納得してしっかりとつかみ取ることが出来るのだ。Babbalanja とは、理性の働きによって神の不在に感づいた人間、そしてそれゆえ、自分の力でもう一度世界の意味を読み取ろうとした人間である。しかし、物・世界は流動し曖昧で、その本質、意味をつかみ取ることは難しく、彼はあらゆる世界観の間を揺れ動く（円環運動する）しかなかった。そして、彼は、物・世界の本質が一点として啓示されること、出来れば善・美・調和として啓示されることを願っている。Yillah は、Babbalanja にとって、まさしく最後の希望の光なのである。

— 3 —

このようにして Taji, Babbalanja らの旅は始まり、一行は Mardi 群島のいろいろな島を訪ねるのだが、なかなか Yillah は見つからなかった。ところで、これらの島の多くは、ある一つの物のアレゴリー、または象徴であると言ってよい。二三、例を例げれば、Vivenza は当時のアメリカを、

Dominora はイギリスを、Maramma は体制化し不毛、毒となったキリスト教を、そして、Pimminee は行きすぎた上品さをそれぞれ表わしている。そして、ある島に Yillah (善・美・調和) がいないということは、すなわち、その島がある欠点を持っているということになり、この方法により、Melville は、当時彼が興味を持っていたいろいろな問題について批評し、風刺することが出来たのである。Mardi 放浪のこの部分は、Swift を思わせるような風刺 (satire) の世界となっている。

さて、旅が終りに近づき Yillah を発見する望みが薄れて来るにつれ、一行の誰もが深い憂うつに沈むようになった。ことに、Babbalanja の失望は大きかった。精神の平衡を保つため、彼は笑おうとするが、その笑いはハイエナの笑いにも似たヒステリックな悲鳴となってしまう。⁽¹⁵⁾ 「笑わなければ生きてはいられない」 (“We must laugh or we die;” p.613) と彼自身言っているように、笑うことは正気を失わないでいるためのぎりぎりの手段なのである。

そんなある晩のこと、一行は激しい嵐に襲われる。“Whither to turn we knew not; nor what haven to gain; so dense the darkness.” (p.622) という言葉は、未だ Yillah を発見できず、この世の暗やみを空しくさまよう一行の絶望をよく表現している。嵐がようやくおさまって朝がおとずれた時、一行は、暁の紅の波に乗って東方からやって来た一そうのカヌーに出会う。そのカヌーの「柔和な老人」(‘a mild old man’: p.622) の案内で、彼らは「嵐に痛めつけられたへさき」(‘Our shattered prows’: p.622) を老人の故郷、Serenia 島に向けることとなった。

花が咲き鳥が歌う青い Serenia 島にも、目ざす Yillah の姿はなかった。しかし、そこには、今までどこにも見られなかったような穏やかな自然と平和に暮す人々の姿があった。老人は彼らに語って聞かせる、「ここでは、皆が、この世の謎を追求することはせずに、ただ Alma (キリスト) の教えに従い、人間の心に生まれつき備わっている愛と義を実行しているのだ」と。

Babbalanja はじめ、Media, Mohi, Yonmy は、この老人の言葉に深く心を動かされる。Babbalanja にとっては、このような生き方は、何も別に目新しいものではなかった。事実、ずっと以前に、彼はこの老人と全く同じようなことを言っているのである。

“My lord ! my lord ! sick with the spectacle of the madness of men, and broken with spontaneous doubts, I sometimes see but two things in all Mardi to believe : —that I myself exist, and *that I can most happily, or least miserably exist, by the practice of righteousness.* All else is in the clouds; and naught else may I learn, till the firmament be split from horizon to horizon.”

(p. 428)

ただ、その当時は、探求への欲求があまり強すぎて、このような生き方をする気にはなれなかった。それが今、深い絶望の中で、Babbalanja の心を根底から揺り動かす力を持ったのである。ついに彼は今まで自分が本当に“mad”であったことを認め、探求を捨て Alma の教えに従うことを誓う。⁽¹⁶⁾
そして、Media 以下三人もこれにならうのであった。

その晩 Babbalanja は夢を見た。それは聖霊に連れられて天国に行った夢であった。そこで、彼は、たとえ人間が死んで天国へ行っただとしても宇宙の謎のすべてが明かされるわけではない（なぜなら、すべてを知ることは Oro と対等になることだから）、そして、人間にとって、Oro は永遠に謎のままであることを知らされた。さらに聖霊は彼に告げた、「すべてを知り尽さない者は満足出来ないし幸福にもなれない。⁽¹⁷⁾ だから、天国は愛に満ちているけれども、また悲しみにも満ちているのだ。しかし、少なくとも悲しみは静けさであり、それこそ人間の魂が望みうる最高の物である」と。

‘To know all is to be all. Beatitude there is none. And your only Mardian happiness is but exemption from great woes—no more. Great love is sad; and heaven is Love. Sadness makes the silence

throughout the realms of space ; sadness is universal and eternal ; but sadness is tranquillity ; tranquillity the uttermost the souls may hope for.' (p.636)

Serenia においても、とうとう Yillah (善・美・調和) はその姿を現わさなかった。物(世界)の本質、意味は依然として曖昧なままである。だが、Babbalanja は、結局、人間には宇宙の仕組みは知りえないと悟ったのである。そして、だからこそ、愛と義を実行し、すべてを知りえない悲しみと静寂に生きることこそ、人間として最良の道であると。彼は Serenia にとどまることに決め、なおも Yillah を求めて旅を続けようとする Taji に向かって、「私の旅は終わった、私たちが探していた物が見つかったからではなく、私が探していた物のうちでこの世で手に入れることの出来る物すべてを、今、私が手に入れたからだ」と言い、別れを告げる。

"My voyage is ended. Not because what we sought is found ; but that I now possess all which may be had of what I sought in Mardi. Here, I tarry to grow wiser still :—then I am Alma's and the world's." (p.637)

— 4 —

Babbalanja を Serenia に残して、Taji 以下四人の旅はなおも続く。Babbalanja の旅は終り、Media らもまた、旅は終わったと主張するのだが、Taji の探求は休むことを知らない。⁽¹⁸⁾ しかし、依然として Yillah の姿はどの島にも見られず、ついに、あと一つの島、Flozella を残すのみとなった。

さて、Flozella の女王 Hautia は、Taji がまだ Yillah と共に Odo に滞在していた頃より彼に興味を示していた。そして、Taji が旅に出てからも、幾度となく使者に花を持たせて彼のもとへよこし、Flozella に来よう誘っていたのである。その Hautia とは、黒い髪・黒い目のブルネットという、Yillah とは対照的な容貌の美人であるが、ちょうど彼女の一見美しい花園に

実はたくさんのじがばちが群がっているように、その美貌にもかかわらず、彼女の実体は、近づいてくる男性の生気を吸いとる妖婦⁽¹⁹⁾なのである。また、彼女の遠い祖先は、昔 Mardi に住んでいた心が美しく善良な種族を追い払った張本人であった。つまり、Hautia とは Yillah と対立する価値を表わす者、すなわち、悪のアレゴリーであると言えよう。そして、Yillah をかどわかしたのも実は彼女だったのである。

Flozella に上陸した Taji は、一時は、Hautia の魅力と手管に誘惑されかかるが、ついに彼女の実体を見抜き⁽²⁰⁾、Yillah の所在を明かすようつめよる。Taji の頑固さに、彼を我が物とすることをあきらめた Hautia は、丘の洞窟のありかを教える。そして洞窟に直行した Taji は、洞窟内の透明な湖の中に Yillah らしき姿を発見するのである。

Swift I fled along the valley-side; ...and gained a twilight arch;
within, a lake transparent shone. Conflicting currents met, and
wrestled; and one dark arch led to channels, seaward tending.

*Round and round, a gleaming form slow circled in the deepest
eddies :—white, and vaguely Yillah.*

Then, as I frenzied gazed; gaining the one dark arch, *the
revolving shade* darted out of sight, and the eddies whirled as
before. (p.653)

この一節は単なる物語のレベルにおいては、Yillah が彼女を嫉妬する Hautia によって溺死させられたということを言っている。だが、Melville がここでイメージによって暗示しようとしていることは何だろうか。その鍵となるのが「非常に深い渦巻の中で、ちらちら光る姿がゆっくりと旋回していた、その姿は白くて、ぼんやりと Yillah の輪郭が認められた」という文である。一読して分かることだが、この文には円のイメージ、物の流動性・逆転性を示す円のイメージが見られる。そして、この Yillah は、流動し円環運動をくり返す Yillah、そのためにぼんやりとしかもとの輪郭が認められ

ない Yillah, 「回転する影」となった Yillah なのである。つまり, Melville はここで, Yillah (善・美・調和) もまた, 他のあらゆる物と同様に, 多分に流動性を含むものであり, Hautia (悪) に逆転する可能性を持ち, きわめて曖昧なものであることを暗示しているのである。

実は, Flozella に着く少し前から, Taji は, 両者の大きな相違にもかかわらず, Yillah と Hautia はどこかでつながっており, Flozella で自分は二人を一緒に発見するのではないかという妙な予感に悩まされていた。

Nevertheless, in some mysterious way seemed Hautia and Yillah connected. But Yillah was all beauty, and innocence; my crown of felicity; my heaven below, and Hautia, my whole heart abhorred. Yillah I sought; Hautia sought me. One, openly beckoned me here; the other dimly allured me there, *yet now was I wildly dreaming to find them together.* (p.643)

そして Flozella の洞窟で, Taji はまさしく予感通り, Yillah と Hautia を一緒に発見した——つまり, 彼は, 善・美・調和であるはずの Yillah が実は逆転性を持っており, Hautia に変わる可能性があることを知ったのである。言いかえれば, この世に完全な善・美・調和など存在しないことを悟ったのである。そしてさらに彼は, この世のすべての物は渦の中の Yillah の如く円環運動し, その本質, 意味はきわめて曖昧であることを直感した。もはや世界は彼にとって完全なものではなく, その意味をつかみ難い混沌と化してしまった。物・世界の本質は, まさしく円そのものなのである。(21)

さて, このような物の流動性・逆転性の認識こそ, Serenia 到着前の Babbalanja の思想の中核となった認識であり, ここまでたどりついた Taji がやがて Babbalanja の思想の全容に導かれるであろうことは想像に難くない。つまりここで, Taji が Babbalanja の放棄された思想と探求を受けつぐのだと言ってよい。

Taji はもはや以前の「神への信頼の念で一杯の」楽天的な Taji ではな

い。彼の心には、完全な善・美・調和を存在させない神へのいら立ちがあり、神をのろう。⁽²²⁾ 彼は Babbalanja に代わって “madman” (p.654) となり、Babbalanja のハイエナの笑いを引きつぐ。⁽²³⁾ そして彼は「回転する影」となった Yillah (物・世界の流動性・逆転性の象徴)を追って、Mardi 群島を去り外海に出てゆくのである。この小説の最後の言葉、“And thus, pursuers and pursued flew on, over an endless sea.” (p.654) ⁽²⁴⁾ には、Taji が半神のごとく永遠に「果てしのない海の上を駆けめぐる」こと、すなわち、彼が Babbalanja の探求を受けつぎ、世界の曖昧性という問題をどこまでも追求してゆくということが暗示されている。

— 5 —

かくして果てしのない海を走り続ける Taji の姿で *Mardi* は終わっているわけだが、それではこの作品を Melville の作品系列の中においてみた場合に、どのような意義をそこに見い出すことが出来るであろうか。

Mardi は Melville の創作活動における最初の転機、成長期を示す作品であると言ってよい。*Typee*, *Omoo* 流の、自身の体験に根ざした冒険物語（もちろん、そこには、ある程度の象徴性とか探求とかが認められるのはあるが）が、*Mardi* に至ってはじめて冒険物語以上の何か——すなわち、アレゴリー、象徴、探求、風刺、哲学的思索の世界——となったのである。そして、この変化が、*Mardi* という作品自体の中に見られる点が興味深い。このような変化は、むしろ、作者 Melville の内面の成長、充実から生じたものである。

さて、この作品に現われている最も特徴的な観念、認識として、物の流動性・逆転性がある。Melville がこの作品を書いた19世紀中頃のアメリカは、西部に無限の土地を持つ発展途上国で、楽天的な気分支配されていた。Emerson はじめ多くの人々が、人間の無限の未来と可能性を信じていたのである。Melville もこの時代の人間としてこのような楽天性を持っており、それが Yillah を失う前の Taji の世界認識や Babbalanja が時折感じる生

命の横溢感などに表われていると言えるだろう。だが、Melville が同時代の他の人々と大きく違っていた点は、彼がこのような楽天性と同時に、神の不在や、物・世界の逆転性などの Babbalanja 的認識を持っていた点である。おそらく、この認識は、*Mardi* を書き進むうちにどんどん Melville の中で確固たるものとなっていったのであり、それゆえ、彼はこの作品の後半で、Taji よりも Babbalanja の方に多くの語る機会を与えたのであろう。この作品の最初と最後では幾つかの重要な物が逆転をおこしている。例えば、物語が始まった時、希望の象徴であった西（Taji は夢の島を求めてアメリカ人らしく西へこぎ進む）も、Yillah がどこにも見つからないため、やがて希望の方角ではなくなってしまう。そしてついに Melville は、善・美・調和のアレゴリーであるはずの Yillah さえも逆転させ、曖昧なものとせずにはいられなかった。さらに彼はこの小説の最後において、Taji 自身に Babbalanja の思想及び探求を受けつがせたのである。

Mardi 以降、物の流動性・逆転性の観念は「白」のイメージで表現され、Melville の思想、作品の中核をなすものとなってゆく。*Mardi* における「白」(Yillah の膚の色)は、最初と最後でその価値が逆転しているものの一つで、すなわち、最初は善と美などを表わすものであったが、最後では、Yillah 自身の変化に伴い、曖昧なものとなっている。1850年に発表された第五作 *White-Jacket* においては、主人公の白いジャケットは、彼の体を保護する物でありながら、その経帷子のような色のために他人から忌み嫌われる物である。さらに、翌年書かれた代表作 *Moby-Dick* の白鯨は美しくもあり大変狂暴なもの、「無色にして全色のもの」('colorless, all-color')⁽²⁵⁾、曖昧なものなのである。そして、*Mardi* の最後で曖昧となった Yillah を追ってゆく Taji の姿は、*Redburn*、*White-Jacket* を経て、*Moby-Dick* の、白鯨を憎しみをこめて追う Ahab の姿につながってゆく。

このように、物の流動・逆転という観念は、以後 Melville の作品の中心観念となったわけであるが、*Mardi* において、Melville はこの観念を、は

じめて、しかも円環という独特の比喩を使って表現するのに成功したのである。*Mardi* は様々な欠点、未熟さを持ちながらも、以後の Melville の世界の豊饒さ、複雑さを予言する Melville の野心作であった。

注

- (1) Murray への手紙 (1848年3月25日。) Jay Leyda, *The Melville Log* の第1巻 p.274 に収録。なお、以下、引用文中の断りのないカッコ内の書き入れやイタリック体の使用はすべて筆者による。
- (2) Bentley への手紙 (1849年6月5日。) *The Melville Log* の第1巻 p.306 に収録。
‘But some of us scribblers, My Dear Sir, always have a certain something unmanageable in us, that bids us do this or that, and be done it must—hit or miss.’
- (3) Herman Melville, *Mardi and a Voyage Thither*
(The Northwestern Newberry Edition の1970年版), p.17。以下、この作品からの引用はすべて上の版によるものとする。
- (4) *ibid.*, p. 642 参照。
- (5) ……though with rapt sight in childhood we behold many strange things beneath the moon, and all Mardi looks a tented fair…how soon every thing fades. (*ibid.*, p.619)
- (6) 注5参照。
- (7) この五人がいずれもまだ独身という事実もこの印象を強める。
Edwin Haviland Miller, *Melville*, p. 144参照。
- (8) Merrell R. Davis, *Melville's Mardi*, p. 173参照。
- (9) この部分のイタリック体の使用は Melville による。
- (10) “Let us aspire to all things, ……What shall appall us? If eagles gaze at the sun, may not men at the gods?” (*Mardi*, p.426)
- (11) ラルフ・エマソン, 「神学部講演」, pp. 163—164。酒本雅之訳, 岩波文庫, 「エマソン論文集上」に収録。
- (12) Babbalanja は自分は一匹の悪魔 (その名は Azzageddi という) に取りつかれていると言っている。*Mardi*, p.419
- (13) “……it is undeniable, that in ten thousand ways, *as if by a malicious agency, We mortals are woefully put out and tormented*,” (*ibid.*, p.264)

- (14) 福士久夫, 「『マーディ』から『白鯨』へ」(アメリカ文学研究評論誌『ろん』第6号), p. 4 参照。
- (15) *Mardi*, pp. 612—613
- (16) *ibid.*, p. 630
- (17) 'No mind but Oro's can know all; no mind that knows not all can be content; content alone approximates to happiness,' (*ibid.*, p. 634)
- (18) "I am the hunter, that never rest, / the hunter without a home, /" (p. 638) と Taji は叫ぶ。
- (19) Hautia は "syren", "snake", "vipress", "shining monster" などと呼ばれている。
- (20) *Mardi*, p. 653.
- (21) 'The point of this profusion of circle imagery is apparently to make it painfully clear that the circle is the most infernal of signs and as *such best represents the nature of things*,'
William B. Dillingham, *An Artist In The Rigging: The Early Work of Herman Melville*, p. 128 参照。
- (22) Hyena filled me with their laughs;...I prayed not, but blasphemed.
(*Mardi*, p. 638)
- (23) 注22参照。
- (24) この引用中の "pursuers" というのは Taji が殺した司祭 Aleema の息子たちで Taji の命をつねねらっている。"pursued" はもちろん Taji のことである。
- (25) Melville, *Moby-Dick* (Hendricks House Edition, 1962年版), p. 193